

徳田 武君の『日本近世小説と中国小説』に対する授賞審査要旨

本書は、日本の近世において、中国の小説が受容され、それらを中心として読本が発生し、やがて長編小説として結実し、近代小説に至る様相を明らかにしたもので、四部三十九章より成る。

第一部「読本前史」 元禄から享保にかけて、通俗軍談、通俗物が多く出版されているが、これらは概して中国の講史(演義)小説の翻訳である。著者は中国の原作を探索、調査し、これと通俗軍談とを子細に比較検討して、白話小説が日本に移入され、翻訳・翻案されるに至った経緯を説明している。かつ通俗軍談と読本との性格の類似点を列挙し、軍談が読本の成立に深い関係をもつことを明らかにしている。通俗軍談は二、三十冊に及ぶ大部の書が少なくなく、従来ほとんど研究が行われなかったが、この未開拓の分野に光を当て、その意義を説き、中国の原典を探究し読解を試みた労は多とすべきである。

第二部「読本の成立」 読本の嚆矢とされる『英草紙』が作られた寛延二年から読本が大衆化する寛政・享和の頃までの作品を重点的に取り上げている。まず雅文壇に属した文人儒者の都賀庭鐘が稗史小説等の俗文芸を戯作するに至った事情を考え、『英草紙』『繁野話』『考句冊』の三部作は、雅俗の折衷(即俗為雅)であったとし、白話小説『三言』及び『聊齋志異』等を粉本としながら、わが国の古代の伝説や歴史物の知識を導入して日本化した旨を説いてい

る。庭鐘の翻案の方法には(一)繋ぐ(中国小説と日本説話とを関連させる)、(二)仮りる(粉本によりながら自己のテーマに従い自由に改変する)、(三)翻する(忠実に粉本を踏襲しつつ自己固有のものを表白する)の三があるが、『英草紙』には(三)が多く、『繁野話』は三方法すべてにわたるとしている。また難解で典拠の探究も進んでいない『莠句冊』について、新たに『西湖佳話』『聊齋志異』雜劇集『四声猿』や日本の『足利季世記』を原拠としたことを考証している。次に上田秋成の『諸道聽耳世間猿』『雨月物語』等について、中国小説の投影を示すと共に、前者の五話に關しては実在のモデルを追究し、これらのモデルを暗に揶揄する秋成独自の手法を指摘している。また初期読本のもつ教戒寓意性を濃厚に表出した『新斎野語』と談義本との交渉を述べ、森羅子(森島中良)の『閑草紙』の粉本が概ね『聊齋志異』である点を明示し、彼の手沢本『警世通言』の書き入れ等を紹介し、なお『中世二伝奇』の作者が清田儻叟である旨を論証している。

第三部「長編読本の成立と展開」享和頃から幕末までは、読本が大量に生産され、長編が主流となった時期であるが、その代表作家曲亭馬琴の創作過程を追跡することを中心に、長編読本の成立・展開を述べている。文化初年の『曲亭伝奇花艷録』で笠翁十種曲の『玉搔頭伝奇』の脚本様式を取り入れ翻案するという新趣向を示した馬琴は、また当時の好尚を反映し、白話小説『石点頭』を利用して、残酷な場面の多い『稚枝鳩』を作った。さらに『杜騙新書』から詐術のおもしろさを会得し、これを粉本として『雲妙間雨夜月』『四天王剽盜異録』『三國一夜物語』『三七全伝南柯夢』を書いている。このような詐術の活用は『旬殿実々記』『南総里見八犬伝』等にも見え、『杜騙新書』から得たものが馬琴の生涯の創作法の一つになっていたとする。読本最盛期の文化四、五年からは、中国の才子佳人小説

『二度梅全伝』『金石縁全伝』『平山冷燕』等の構成を取り入れ、『三七全伝南柯夢』『句殿実々記』『松浦佐用媛石魂録』など、怪奇陰惨味を減じた巷談情話物を多作したと述べ、併せて『金石縁全伝』を翻案した小枝繁の『絵本璧落穂』、『琴香亭』を翻案した文人三宅匡敬の『絵本沈香亭』を取り上げ、馬琴の作と比較して翻案の方法の違いを示している。馬琴は文化四年、史伝物の初作『椿説弓張月』を出すのが、これと同様な性格をもつ中国の『狄青演義』からの撰取を詳述している。なお弓張月の巻頭の題詞は『南宋志伝』『楊家將演義』の詩を借用して居り、『月氷奇縁』等にも『狂詩選』（漢国狂詩選）の詩を採ったものがあることを指摘している。

馬琴は八犬伝九輯中帙付言に、稗史七法則を掲げ、小説の作法を説いているが、著者はその中の隠微を除く六則は毛声山の読三国志法の中に見え、直接の粉本はそれであることを検証し、隠微も読三国志法第一条の正統論を参考にしているのではないかと推論する。隠微は言外に忍びこませてある勸懲思想、因果思想を言うもので、前掲付言に「百年の後、知音を俟て是を悟らしめんとす」と記しているが、『開卷驚奇俠客伝』には南北朝正閔論を勸懲思想として盛りこみ、これを隠微していると著者は述べている。さらにこの正統論、勸懲思想は易の変易思想に連なるが、八犬伝等の史伝物では、武家政治に対する史観や幕政への批判を隠微なかたちで布設していると説き、隠微が馬琴の小説の原理であったとしている。このほか、馬田柳浪の『朝顔日記』への『桃花扇』『通俗金瓶伝』等の投影を指示し、高階正翼の『金瓶梅』の訓訳本について、その師遠山荷塘の施訓による旨を述べ、荷塘の編著にも言及している。

第四部「読本と近代小説」 坪内逍遙は『小説神髓』で八犬伝を非難したが、少年期に耽読した馬琴作品の影響が残存し、俠客伝と趣向の似た英国の歴史小説『リエンジイ』を翻訳している。また幸田露伴は八犬伝の写実性を評価

し、八大伝の一部分を明治風に新生させた戯曲『其佛今様八大伝』を書いたのをはじめ、『いざなとり』『天うつ浪』『風流微塵蔵』等に八大伝利用の跡が認められると述べている。

本研究が先人の域を大きく超えている所以は、一つは著者が日本文学者にして同時に中国語に習熟し、中国近世の白話小説を十分に読みこなす力を備えていることである。これによって、日中両国の近世小説の内容、文章、語彙等を精密に比較検討して、日本の近世小説が、中国の小説から大きな影響を受けたことを明らかにすると共に、それが又単なる受容でなく、両国の国情、国民性の相違から、いかなる変改がなされているかについても詳説している。

今一つは、日本近世小説の原作や粉本となった中国白話小説のテキストを、中国の北京図書館等に探り、あるいは日本の図書館・文庫等を博搜するなど、多大の辛苦を重ねて、わずかに残存する稀覯な資料を蒐集・利用したことがある。

こうして本書は、日中比較文学研究上に大きな業績をあげていると共に、近世の読本の由来、発展、そしてそれが近代文学に至る過程を追究し、以て読本の特徴を明らかにしようとして居り、すこぶる有意義にして独創的な労作であると認められる。